
真夏の失敗

マリア様がみてる 小説本

PARALLEL ACT

真夏の失敗

もくじ

計画	7
海！ポロリはないよ	9
酒池肉林	18
祐巳に何が起こったか	25
あとがき	28

イラスト／ロンゲ魔神K

真夏の失敗

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

さわやかな朝の挨拶が、澄みきつた青空にこだまする。

マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。

スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカ

ラーは翻らせないように、ゆっくり歩くのがここでのたしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒など存在していないはずもない。

私立リリアン女学園。

明治三十四年創立のこの学校は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。

東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。

時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だに残つ

ている貴重な学園である。

真夏の茹だるような暑さの中、薔薇の館にはクーラーは無い。そんな時、何か楽しいことはないか？ 何か涼しいことはないか？ と、考えてしまうものだ。そして、一夏の思い出作りも。

計画

1

「夏休み、皆でどっか行つてないね」

祐巳がふと呟いた。今は夏休みだが、学園祭の準備開始が近づく中、山百合会の面々は自主登校していた。

「祥子さまの別荘に行つたじゃない？」

由乃さんは、軽井沢の別荘に皆が集まつた時の事を持ち出す。あの時は心の支えになってくれて、嬉しかった。でも……
「あれはどっか行くとつより、自然と集まつたというか……」

「つまり、祐巳さんは山百合会で旅行に行きたいのね？」

そう、まさしくそれ。流石志摩子さん。

「去年はどうだったんですか？ 由乃さま」

乃梨子ちゃんが由乃さんに問いかける。由乃さんは、高等部に進学して直ぐに山百合会に入つたので、去年の夏休みの事を知っているはず。

「別にどこにも行かなかつたな。一昨年どこか行つたという話も聞いてないし」

「じゃあ、今年はどうか行こうよ」

「盛り上がってるね、一体何の話？」

盛り上がっている所に、令さまと祥子さまが部屋に入ってきた。

「山百合会皆で旅行に行こうという話をしてたんです」

「旅行？ これから学園祭の準備で忙しくなるのよ。そんな暇無いわ」

祥子さまが至極まともそうな事を言う。でも本当は暑い中、どこかに出かけるのが嫌なだけじゃなからうか。

「毎日準備しているという訳じゃないし、合宿として学園祭について打ち合わせれば良いと思います」

「そうね、それ良いね」

「令、あなたまで」

祥子さまの顔が不機嫌になる。

「それじゃあ、お姉さまは欠席という事で、残りでプランを立てましょう」

「な！ 私を除け者にする気？」

「だって、お姉さまは行かれないんでしょう？」

祥子さまの顔が詰まる。

「分かつたわよ。行くわよ」

「それじゃあ、全員参加という事で」

祐巳は、無事にお姉さまを乗せ、ほくそ笑む。

「それで、どこにするの？」

「山には行つたし、やっぱり夏と言えば海？」

「海かあ…… 水着どうしよう？」

「あ……」

皆が、由乃さんの事を思い出した。由乃さんは昨年心臓の大手術をやったのだ。

「やっぱり、海じゃなくて山が良いかな？」

「何？ 私の事を気にしてるの？ 大丈夫よ」

「でも、手術の跡が……」

「手術跡って言つても、脇に小さくあるだけだから、ビキニだつて着れるわよ。見せようか？」

そう言つて、由乃さんは制服に手をかけた。

「いい、別に脱がなくて！」

「そお？ 良い、じゃあ私はビキニにしよう！ 令ちゃん、買い物付き合つてね」

「はいはい」

「ねえ、いつそ、皆で買いに行く？」

「それも良いけど、海でいきなり見せっこする方が楽しいんじゃない？」

「あ、その方が面白いかも」

「皆さん、水着も良いですが、場所とか、日程の方を先に話し合った方が良いのでは？」

冷静かつ、旅行慣れしている乃梨子ちゃんが地に足着いた提案をする。皆それに同意し、どの海が良いか？ どの様に泊まるか？ そして都合の良い日を出し合った。

海！ ポロリはないよ

1

「着いたー！」

海の側のバンガローを前にして、皆一斉に叫ぶ。朝K駅に集合し、JRと私鉄とバスを乗り継いで半日。さらに歩きも加わった。

「地図見て遠いと思ったけど、これ程とは……」

「景色は綺麗だし、人もあまり多くないし、良い場所だったんですよ……」

この場所を選んだのは乃梨子ちゃん。中学の時にキャンプに来て、良い場所だったから提案したんだそうだ。

「でも、男子がいない事を忘れてました……」

共学だった乃梨子ちゃんの一行は、重い荷物は男子が運んだ。しかし、リリアンは女子校。山百合会には男子はいない。例え荷物が重かろうが、自分達で運ばなければならぬ。

「こんな事なら、優さんに荷物持ちか、車を頼めば良かったわ」

祥子さまがとんでもない提案をする。でも、祐巳も祐麒を荷物持ちをさせようと一瞬思ったのは内緒。

「それは止めてください、お姉さま」

「そう？」

「せっかく山百合会だけの水入らずで来ているんですから。それに荷物持ちだけなんて、柏木さんも可哀想です。」

勿論可哀想だなんて思っていない。柏木さんが来たら気分が台無しなだけ。それに、無闇むやみに恩を売りたくない。

「ささ、そんな事より、早く荷物を運び入れよう」

そう言っつて、令さまは荷物をひよいと担かつぐ。流石鍛え方が違う。

2

バンガローに荷物を運び入れると、祐巳や由乃さんはバタンと大の字になって倒れた。

「あゝ もう疲れた！」

「由乃、これくらいで情けない」

令さまが、バンガローの窓を開けて空気を通しながら、由乃さんをたしなめる。

「祐巳も、はしたなく寝転がるんじゃないありません」

「はい」

二人は、仕方なく起き上がる。祥子さまと乃梨子ちゃん
は、疲れてはいるが倒れるのは堪えたようだ。志摩子さん
は体力があるのか、平然としている。

「じゃあ、まず掃除」

「えええっ!？」

「埃まみれの中寝たいの?」

「それは……」

前の利用者も掃除はしていったのかも知れないが、日数
が経っている。見た目ではよく分からないが、雑巾ぞうきんで拭く
と色が黒く変わった。

「ねえ、由乃さん。服汚れてない?」

「私も」

祐巳と由乃さんは互いに背中を見せ合う。幸いにも、ち
よっと払うと落ちる程度だった。皆が寝転がらなかった本
当の理由は、服が汚れるのを嫌ったからじゃないだろうか。

掃除が終わって、ようやく着替え。めいめい自分のバッ
クから水着を取り出す。由乃さんは、宣言通りビキニだっ
た。手術跡の事で、気を遣わせない為と、元気になった自

分を見せたいんだろう。

ふと、祐巳は祥子さまの方を向く。志摩子さんは去年同
級生だったし、由乃さんは今年同級生。学校指定のスクー
ル水着とはいえ、水着や着替えは見慣れている。でも、祥
子さまの水着はまだ見たことがない。

「……? 祐巳、何じろじろ見てるの?」

「あ、いえ、何でもありません」

いけないいけない。これじゃまるで変態だ。

着替え終わって、皆外に出る。着替え中はバスタオルと
かで隠していたのでよく分からなかった水着が、白日の下
に晒される。

祥子さまは黒のビキニにパレオ。素晴らしいプロポーショ
ンが眩しい。

「だから祐巳、じろじろ見ないの」

「でも、羨ましいんです。その65Dのプロポーション……」

「あら、あのブラはお古と言ったでしょう? 今は違っわ
よ」

「今は何なんです?」

「秘密♡」

「いいじゃないですか、教えてくれても」

「駄目」

後でこそっと祥子さまのブラを調べよう…… は!?! い

かんいかん。これじゃ本当に変態だ。

令さまはワンピース。背が高いのになんか勿体ない。

「令ちゃんならビキニの方が似合うと思うのに、ワンピースしか着ないのよ」

「だって恥ずかしいよ……」

「女だけしかいないんだからいいじゃない」

志摩子さんは白いビキニ。

「志摩子さん、意外と大胆なんだね」

「父が、これ以外の水着にはお金を出さないと……」

「……」

え〜っと、志摩子さんのお父さんってお坊さんだよな？

乃梨子ちゃんは競泳用水着だった。

「海に競泳用？」

「これだと、どこでも着れて良いんです。幾つも水着を買いなお金無いし」

乃梨子ちゃんの場合、水着にお金を回すくらいなら旅行に回すのだろう。それに、競泳用水着だと、胸の小ささを誤魔化せる。

祐巳は、赤いタンクトップとショートパンツ。

「似合ってるわよ」

「体型隠せるもんね」

「……」

お見通しで。でも、体型隠したいなら由乃さんも……

「私はくびれあるもん」

「……」

3

「海だ〜!!」

祐巳と由乃さんは海岸に着くと、一目散に走っていった。

「由乃、準備体操!」

令さまの声も聞かずに。

祐巳と由乃さんが水を掛け合って遊んでいる間に、令さまはビーチパラソルを挿し、その下に様子さまと志摩子さんが座る。令さまと乃梨子ちゃんは水遊びに加わる。

「お姉さまも来ませんか!？」

「私は良いわ!」

「そんなこと言わずに!」

そう言っつて、祐巳は様子さまの所まで行き、腕を引っ張る。分かった、分かったから引っ張らないで」

様子さまは、羽織っていたシャツをビニールシートの上に畳み、海岸の皆の所に行く。

「ほら、志摩子さんも」

「私はここで良いわ」

「でも、一人で座ってるのもつまらないでしょ」

「そんな事ないわよ。皆が楽しんでるのを見てるだけで楽しいの」

「そう？　じゃあ、気が向いたら来てね」

志摩子さんは心が強い人だ。来ないと言ったら来ないだろう。

残念に思いながらも、海辺ではしゃぎ合って遊んでいると、誰ともなくビーチバレーをやるうと言つ事になった。

「チームはどうする？」

「やっぱり、色別じゃない？」

「そうすると、乃梨子ちゃんが一人だよ」

「じゃあ、私も……」

そう言つて、志摩子さんが立ち上がる。

「志摩子さん、ビーチバレーやるんだ」

「ええ、乃梨子一人じゃ出来ないでしょ」

「じゃあ、色別のチームで決まりだね」

そして、色別の姉妹に分かれた。

「志摩子さん、絶対勝ちましょうね」

「ええ」

「でも、黄薔薇には令さまがいるし、紅薔薇の祥子さまも侮れないと思いますよ」

「大丈夫よ。お二人は海で遊んでて疲れてらっしゃるけど、

私は休んでいたから全然疲れてないわ」

「ええっ!?　まさか、その為に海で遊ばなかったんですか？」

「さあ、どうかしら」

このやりとりは、他の組には聞こえていない。

「あの二人は、何をこそ言ってるのかしら」

「きつと作戦を立てているんですよ、お姉さま」

「生意気な。祐巳、私は負ける事が嫌いな」

「はい、分かっています、お姉さま。絶対に勝ちましょう」

一方黄薔薇は、

「勝つわよ、令ちゃん！」

「ああ」

「皆々！　負けた組が今日の洗い物全部やるのよっ!!」

「えっっ!!」

紅と白から、抗議の声が上がる。しかし、皆負ける気はないので、強く反対はしない。

「さあ、絶対に勝つわよ！」

「由乃、そんな事言つて大丈夫？」

「大丈夫、うちには令ちゃんがいるんだもん。負けやしないわ」

「でも、うちには由乃がいるんだよ」

「それどういう意味よ!？」

令さまと由乃さんの言い争いが始まる。

「また始まった」

「先に私達がやりましょう」

「そうですね」

そうして、紅薔薇チーム対白薔薇チームの対戦が始まった。結果は、紅薔薇チームが僅差で勝ち。やっぱり、祥子さまは運動神経も良い。

次はようやく喧嘩が終わった黄薔薇チームと紅薔薇チームの対戦。剣道で鍛えた令さまは、砂場の上でもバランスを崩すことがなく、手強い。それに身長も高い。でも、やはり由乃さんが足かせになった。運動神経が元から無く、足腰も弱い由乃さんは、まともに砂場を動くことも出来ない。あっけなく紅薔薇チームの勝利。

最後は白薔薇チームと黄薔薇チームの対戦。ここで負けた方が最下位で洗い物。どちらも負けられない。

「さつき見てたけど、志摩子さん達には勝てると思う」

喧嘩の最中も、プレイはしつかりと見ていたようだ。スポーツやる才能は無い由乃さんだが、見る才能はある由乃さんのこと、自分達が上だと判断したようだ。

「由乃、油断は禁物だよ」

「大丈夫よ、秘策もあるもん」

試合が始まり、乃梨子ちゃんがトスを上げ、志摩子さんがジャンプすると由乃さんが叫んだ。

「うわ、志摩子さんの胸揺れてる！」

「え!？」

変な事を言われた志摩子さん、思わずすっぽ抜け、あっけなく点を取られてしまう。

「どうだ！」

「由乃、秘策ってそれ？」

「そうよ」

「はあ……」

令さまは頭を抱える。そりゃそうだ。でも、ここで祐巳に疑問が生まれる。

「お姉さまも揺れますか？」

「な、何を言ってるの!？」

いきなり変な質問をされて、祥子さまも戸惑う。

「私、前向いていたんで分からないんです」

「どうだっていいでしょう、そんなこと」

「どうでも良くないです。私揺れないので」

「揺れても良いこと無いわよ。痛いだけだし」

「やっぱり、揺れるんですね」

「……祐巳、ちゃんと試合を見なさい」

「……はい」

それ以上祥子さまは答えしてくれない。今度観察しよう。
「由乃さま、志摩子さんを変な目で見ないでください」

「乃梨子ちゃんは、むしろ揺れない仲間でしょ」

「私のことはどうでも良いんです!」

「乃梨子」

声を荒げる乃梨子ちゃんを、志摩子さんがたしなめる。

「いいのよ、今は試合に集中しましょう」

「でも……」

「さ」

そして、あっけなく志摩子さんは点を取り返す。

「動きが違うわね」

「さっきまでとですか？ やっぱり、胸のことを言われて、

志摩子さんも怒ったんでしょっか?」

「それもあってしょうけど、むしろ……」

「むしろ?」

「私達にわざと負けた」

「ええっ!」

志摩子さんがそんなことを!?

「そして、黄薔薇の二人を油断させて、最下位にならないようにする」

「なる程。でも、志摩子さんがそんな事を……」

「あの子、細やかな心遣いが出るでしょう? だから細

やかな駆け引きも出来るのよ」

「そう言うものか?」

「何にせよ、もうすぐ後片付けの当番が決まるわ」

本気を出した白薔薇チームに黄薔薇チームは、正確には由乃さんはたじたじ。なすすべ無く黄薔薇チームの最下位が決定した。

4

夕食は、バンガローの隣でバーベキューである。経験者は、令さまと由乃さんと乃梨子ちゃん。令さまと由乃さんは道場でキャンプに行った時に経験がある。

「お姉さまはお料理できるんですか?」

「失礼な。これでも家庭科の成績は良いのよ」

本物のお嬢様である祥子さまの事だから、普段は家でも一流のシェフの料理を食べているに違いない。あ、でも清子こおは小母さまはご自分でも料理なさる。本物のお嬢様だからと言って、料理を出来ないことはないのかも知れない。それに、プライドの高い祥子さまのことだ。成績の低い科目があることなど耐えられないだろう。

「私のことより、貴方は大丈夫なの?」

「えへへ……」

家庭科の成績、それ程良くはありません。もっぱら食べるの専門です。こんな時、もっとお母さんの手伝いをして

いれば良かったと思う。

「そんな、バーベキューなんて材料切るだけなんだから簡単だよ」

「そうよ。ご飯もスイッチ入れるだけだし。それとも、キャンプ定番のカレーにでもすれば良かった？ ご飯も飯盒で遠慮しときます」

せつかくこのバンガローには文明の利器が付いているのに、わざわざリスクを高めなくても。

「でも、飯盒のご飯って美味しいですよ。志摩子さんは食べたことがあります？」

「私はないわ」

「今度、志摩子さん家の庭でやってみます？」

「面白そうね。でも、私達より父が張り切りそうだね」

「タクヤ君も♡」

相変わらず白薔薇姉妹は仲睦まじい。

基本的に材料を切つて、串を通すだけなので、準備は直ぐに済んだ。そして、いざバーベキューが始まると、肉の取り合い。そこは姉も妹も関係無かった。

「お姉さま、それ私の肉！」

「私はレアが好きなのよ」

「お腹壊しますよ」

「十分焼けてるわよ」

例え祥子さま相手でも食欲には勝てない。

「由乃、それ未だ早い」

「だって、取られちゃうもん……ぐえ……」

「ほら、言わんこつちやない」

そして白薔薇姉妹は、漁夫の利が如く、箸争いの中放置された肉を摘んでいた。

5

後片付けは、ビーチバレーで最下位となった黄薔薇の担当。その間、花火の準備をする。

「花火って、こんなものもあるのね」

「まさか、お姉さまは花火をなさった事がないんですか？」

「ええ。花火は、空に上がる物ばかりだから」

「打ち上げ花火はうちでもよく見に行きますよ。場所取りが大変ですけど」

「場所取りってなあに？」

「え!? 場所取りしないんですか？」

小笠原家の事だから、場所取りはお手伝いさんの仕事なのだろうか？

「だから、場所取りって何のこと？」

「えと、花火が始まるよりも早く行って、土手にビニールシートとか敷いて『ここは私達家族のだ』って主張するんですけど」

「ビニールシート？ 皆椅子に座って見るんじゃないの？」

「いえ、椅子なんか使わなくて、ビニールシートに座るんですよ。場所取り出来なかつたら、立ち見ですけど」

「立ち見!? 立ったまま!？」

「ええ、それよりも、椅子って……?」

「花火会場には観客席があるでしょう?」

「そんなのあるんですか!？」

「知らないの?」

流石小笠原家、花火はVIP席でのご観覧らしい。

バケツの準備も出来、黄薔薇による後片付けも終了した。後片付けは皆でやった方が当然早いのだが、由乃さんが自ら言い出した手前、手伝われるのを拒否した。そして、小さな花火大会が始まる。

「綺麗ね……」

祥子さまは、初めて間近で見る花火に見とれていた。大空に咲く大輪の花も良いけれど、地上に咲く雑草の花も可愛らしい。

それに、打ち上げ花火はただ見るだけ。手持ち花火は、

自分で火を付けたり、振り回したり、逃げ回ったりする楽しみがある。本当は危ないのでやっちゃいけないだろうけど。

もう罰ゲームは済んでいるので、花火の片付けは皆でやった。焦げを落とすのが大変な、バーベキューの片付けの方を皆でやって、花火の片付けを罰ゲームにするくらいで丁度良かったんじゃないかと思うけど。

「あゝ 楽しかった」

「私はちよつと休むわ。少し疲れたし」

片付けが終わって、バンガローに戻ってくる。全員が入った所で、突然電気が消えた。

「キャ〜!!」

突然の出来事に、皆一斉に驚き、叫ぶ。そしたら、直ぐに電気が点いた。スイッチがある方を見ると、由乃さんがスイッチに手をかけている。

「今回スケジュールに肝試し無かったでしょ。やっぱり少しは恐怖体験がないと……」

自業自得なのだが、自分達だけでバーベキューの後片付けをやった事も癪しゃくだったのだろう。由乃さんの顔がにやけている。が、その結果、一番の恐怖を味わうのは由乃さん

だった。特に祥子さまの恐ろしさと言ったら……

酒池肉林

1

乃梨子ちゃんが自分のバツクをいじっていると、ゴトツと転がり落ちる物があった。

「乃梨子ちゃん、何か落ちたよ」

「ああ、すみません」

「何？ これ、こけし？」

祐巳は、乃梨子ちゃんのバツクから転げ落ちた、小さなこけし人形を拾う。何も市松人形がこけし人形を持って来なくても。

「何でこけしなんて持って来たの？」

「私、こ、これがないと眠れなくて」

「ふうん…… そうなんだ」

「そんな事より、祐巳さま。これでも……」

そう言っつて、乃梨子ちゃんは冷蔵庫まで行くと、そこから缶ビールを取り出してきた。バーベキューの準備の時は

入ってなかったのに、いつの間に。

「お、乃梨子ちゃんいい物持ってきたね」

令さまがビールを取り出してきた乃梨子ちゃんを見つけ、咎めるどころか自分もバツクからワインを取り出した。

「ワインですか。意外ですね」

「そう？」

「てつきり日本酒か焼酎かと」

「焼酎も持ってきたけどね。でも私はワインの方が好きだな。でも、乃梨子ちゃんがお酒持ってくるとは思わなかったよ」

「仏像サイトのオフ会でよく飲んでるので」

仏像サイトの仲間は大人が多い。オフ会にはお酒がつきもの。

「でもビールはバーベキューの時に飲みたかったな」

「食材でいっぱい、冷やせなかったんですよ」

それでバーベキューの材料を取り出した所に、缶ビールを入れたのか。

「私、お酒飲むの初めてです」

「そうなんだ」

「お屠蘇とそや、白酒は飲んだことありますけど」

「あれはお酒の内に入らないよ」

「あなた達！ 何してるの!!」

激しい叱咤しつたの声に振り向くと、祥子さまが怒りの表情で立っていた。

「未成年が飲酒なんてして良いと思ってるの!? 今、あなたは止める方でしょう! それを自分から……」

「まあ、祥子。そんなに固いことを言わずに……」

「固いこと!? 未成年が飲酒をするのが!?!」

「今時高校生でお酒なんて、誰でも飲んでるよ」

「誰でも!? あなた達二人だけでしょう!」

「はい! 私も飲んでます」

そう言つて、由乃さんが手を挙げた。

「由乃ちゃん!? あなたも!! 志摩子! あなたはどんな

の!?!」

「すみません。私も……」

「志摩子まで!! これじゃ山百合会は非行グループじゃない……」

真面目な志摩子さんまで飲酒していたという事で、祥子さまは呆れて肩を落とす。

「これで、飲んだ事無いのは祥子と祐巳ちゃんだけだね」

「うく…… 祐巳、合わせる必要はないわよ」

「祥子、単に飲めないだけでしょ」

「飲まないのよ!」

祥子さまの怒りが増す。そして、令さまが祥子さまの耳元に近づき、そっと耳打ちする。

「祐巳ちゃんが酔っぱらったら、きっと可愛いと思うな」

「な!?!」

「お姉さま。私、酔っぱらっちゃったみたいです」

「もう、しょうがない子ね……」

「お姉さまのお膝で眠らせてくださあい」

「?」

「?」

令さまに耳打ちされている祥子さまの顔が、段々とろけて、赤くなっていく。祐巳は、自分が妄想のネタにされているとは露つゆにも思わず、様子を見ている。

「わ、分かったわ。私にもお酒くらい飲める事を証明してやるわ。乃梨子ちゃん!」

「はい」

祥子さまが酒を注文すると、待ちかまえていたかのように、乃梨子ちゃんが焼酎が注がれたカップを渡す。

「いいわね。飲むわよ」

祥子さまが、ぐいと焼酎を口の中に流し込む。

「あ、そんなにいきなり飲むと……」

「ぶっ！ げほっ！ げほっ!!」

初めての飲酒で、いきなり焼酎。それをぐい飲みして祥子さまは激しく咽せた。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

祐巳は祥子さまに近寄り、背中をさする。祥子さまは飲酒ではなく、祐巳にみつともない姿を晒した事が恥ずかしく、顔が赤くなつた。

「初心者がいきなり焼酎ストレートなんて無理だよ」

祥子さまが噴いた焼酎を浴びてびしょ濡れになった令さまが、自分の持ってきたワインを差し出す。いっぞや令さまの紅茶を浴びせられた祥子さまの、ささやかな仕返し……の筈はない。

「これなら、飲みやすいよ。甘口だし」

祥子さまは、令さまから差し出されたワインのカップを受け取り、口を付ける。

「何これ？ ジュース？」

「ちゃんとお酒だよ」

令さまが持ってきた白ワインの甘口は、アルコールを感じさせないくらい甘く、言われなければ葡萄ジュースだと思っただろう。祥子さまは、一気に飲み干した。

「こんなの、全然平気よ」

「別に一気に飲まなくても……」

甘口はアルコールの量が比較的少ないが、一気に飲めば回りは早くなる。

「じゃあ、私も」

そう言つて、祐巳もワインを受け取る。

「あ、美味しい」

口の中に葡萄の味が広がる。葡萄と言ってもグレープ味ではなく、「葡萄を漬して飲んだらこっぴつ味がするんだろうな」と言つ味。甘党の祐巳にもびつたり。

「お酒つて、こっぴつ味がするんですね」

「うーん、これは本当に甘いからね。例えば、この焼酎飲んでみる？」

そう言つて、令さまは焼酎をカップに少しだけ注いで祐巳に渡した。

「うげ！」

口に入れると、ひりひりして熱い。喉や鼻がツーンとする。ちよつと涙が出てきた。これをぐい飲みしたら、そりゃ咽せる筈だ。

「度数が高いと苦しいでしょ。でも、慣れてくると美味しくなるから」

「そうなんですか……」

飲めるようになるのは楽しみではあるが、さっきのワイ

ンみたいな物だけで十分な気もする。

「そこ、勝手に始めてないで、まずは乾杯でしょ、乾杯」

由乃さんが、缶ビールを手に呼びかける。そして、由乃さんと乃梨子ちゃんが全員に缶ビールを配ってまわった。

「乾杯！」

そのかけ声で、一斉に口を付ける。苦い。お父さんはお風呂上がり美味しくそうに飲んでるけど、あまり美味しくなくない。祥子さまも美味しくなかったようで、二人で顔を見合わせる。

志摩子さんの方を見ると、美味しくそうにビールを飲んでいる。真面目な志摩子さんがお酒飲んでるなんて意外だ。

「志摩子さんがお酒飲むなんて意外ね」

「そう？　うちは良く町内会とかの宴会会場になってるから、自然と多くなるのよ」

「それで、一緒に飲んでたの？」

「そう、注いでまわってたから、逆に注がれたりして」

美人の志摩子さんに次いで貰うお酒は美味しいんだろうかと、同性ながら思う。

「志摩子さん、まさかわかめ酒なんてさせられてないよね」

「まさか。そんな事しないわよ」

「わかめ酒って、わかめ味のお酒？」

「祐巳さま、世の中には知らない方が良い事もあるんです」

「はあ……」

帰ったらお父さんに訊いてみよう。

「何？　乃梨子ちゃん、志摩子さんでわかめ酒を飲みたいの!？」

と、由乃さんが叫ぶ。由乃さんの顔は、もう赤くなっている。缶ビールだけでなく、焼酎を注いだと思われるカップも転がっている。

「せっかく終わりにかけていたのに、蒸し返さないでください！」

「由乃さんはわかめ酒がどんなのか知ってるの？」

「勿論知ってるわよ。わかめ酒って言うのは……」

「わー！　わー！　わー！」

乃梨子ちゃんが叫んで、由乃さんの言動を遮る。

「乃梨子ちゃん五月蠅い！」

普段冷静な乃梨子ちゃんが焦るなんて、一体どんなお酒なんだろう？

「由乃、いい加減にしろよ。乃梨子ちゃんも困ってるじゃない」

「何よ!?　私よりも乃梨子ちゃんの肩を持つの!?　せっかく祐巳さんを、大人の階段登らせようとしてるのに！」

「大人の階段って……」

「もし祐巳さんがわかめ酒を知らないままでいて、それで

困るのは祐巳さんなのよ!」

「わかめ酒知らなくても困らないって」

「甘い! 甘いわ! 令ちゃんは人生嘗めてる!!」

「そんな、そんなに怒鳴らなくても……」

「いいえ! この際だから言わせて貰うけど、令ちゃんは

女々しいのよ」

「そんな事……ぐすん……」

とうとう令さまは泣き出してしまった。お酒が入って涙もろくなつたようだ。でも、二人の喧嘩はいつもの事だし、何より今の由乃さんを止める事は不可能だ。暫く飽きるまで放つとこう。

2

「祐巳」

「うぎゃっ!」

何か可愛らしい猫なで声がして、祐巳は誰かに抱きつかれた。よく見たら祥子さまだ。制服越しに抱きつかれた時也十分柔らかかったが、パジャマの薄い生地越したと、さらに柔らかい。

「何ですか、お姉さま?」

「これ、美味しいわね、全部飲んじゃった」

祥子さまが持っているワインの瓶が空っぽになっている。

顔も真っ赤だ。まだほとんど飲まれてなかった筈なのに、残りを全部一人で飲んだのだろうか? それって、どれくらい酔ってしまうものなんだろう?

それより、口が焼けるような焼酎と違い、美味しかったワインが一口しか飲めなかったのが残念。令さまはまだ持ってきてないのだろうか? 訊こうにも、今黄薔薇の二人はじゃれ合っている最中。

「祐巳柔らかい」

「うわわわ」

祥子さまが祐巳に抱きついて、頬をすりすりしてくる。祥子さまって、酔ったら聖さまみたいになるんだ。祥子さまの頬が祐巳の胸をすりすりする。困ったな。

「ここは硬い……」

「……」

やはり、祥子さまはまな板はお気に召さなかった様だ。そう言えば、一度だけ聖さまが抱きつくだけでなく、胸を揉んできたことがあった。普段抱きつく時は謝らないけど、その時だけは謝られたのがショックだった。

「祐巳は全然酔ってないわね」

「あまり飲んでないので」

「駄目よ! 飲まなきゃ!!」

さつきまで大反対していた人の言葉だとは思えない。

祥子さまは立ち上がると令さまの元にふらふらと歩いて行く。既に真つ直ぐには歩けないようだ。

「令！ お酒！ 出来れば祐巳が飲めるような奴！」

「それなら、まだバッグや冷蔵庫に入ってるから……」

「令ちゃん！ 話逸らさない！」

「一体何話してるの？」

「令ちゃんが祐巳さんに『わかめ酒』を教えちゃ駄目って言うんですよ！」

まだその話続いていたのか。てつきり他のネタで喧嘩していると思ってた。

「わかめ酒…… 由乃ちゃん！」

「はい!？」

祥子さまの厳しい声に、由乃さんは思わずたじろぐ。

「直ぐにお酒用意しなさい！ 今から実践で教えるのよ」

「実践!？ …… 承知！」

そう言つて、由乃さんは冷蔵庫から日本酒を取り出す。

「さあ、用意しました」

「そう。じゃあ、祐巳！」

「は、はい」

いよいよ、乃梨子ちゃんと令さまが隠している「わかめ酒」の正体分かる。でも、わかめはどこ？

「脱ぎなさい」

「……へ？」

「脱ぎなさい！」

「あ、あのう……」

「あなたでわかめ酒をするのよ！ だからズボンとパンツを脱ぎなさい!!」

「えええっ!？」

（わかめ酒って一体何!？）

さつきまでわかめ酒を教えるのを反対していた乃梨子ちゃんなら、自分の危機を救ってくれるかも知れないと、姿を探した。が、乃梨子ちゃんは既に酔いつぶれて志摩子さんの膝枕で寝ていた。

（そんなあ……）

「何をしてるの!？ わかめ酒について知りたいんじゃないの!？」

「別に知りたい訳じゃないです。それに、何で脱がなきゃいけないんですか？」

「パンツ穿いてたら、わかめ酒出来ないじゃないの」

「ええっ!？」

「ええい、じれったい。由乃ちゃん、祐巳を押さえてて」

「がっつん！」

そう言つて由乃さんが祐巳を羽交い締めにした。そして

祥子さまは祐巳のパジャマのスボンに手をかける。祐巳は足をじたばた動かして必死に抵抗する。

「嫌あつ！」

「おっほほほ。良いではないか。良いではないか」

きつと由乃さんは「くるくる。あ〜れ〜」を出来ないことを残念に思ってるに違いない。

「そつだ！ 私、お姉さまのわかめ酒を飲みたいです！ 教えてくれるのなら、お姉さまのわかめ酒を」

「どうして私がわかめ酒をしなければいけないの？」

「可愛い妹のために一肌脱ごうとは思わないんですか？」

「思わないわ。それに、私は可愛い祐巳のを飲みたいのよ」

「そんなあ！」

「聖さまには脱いだのに、私には脱がないの!？」

「聖さまにも脱いでませんっ！」

「いい加減に観念なさいっ！」

「い〜や〜!!」

「うっ……」

祐巳のスボンが半分ほど下ろされた所で、祥子さまが気を失って倒れ込んだ。祐巳の太股（しかも生）に、祥子さまが顔を埋める凄（うす）い格好になる。祥子さまが倒れて視界が広がる、令さまが手刀を構えていた。剣道も上手くなると、竹刀を使わなくても相手を気絶させる事が出来るよつだ。

「令さま、ありがとっございます……」

「ちよつと、令ちゃん何するのよ！ せつかく、良い所だったのにつ!!」

由乃さんが羽交い締めを解くと、令さまに食ってかかる。

その間に、祐巳はスボンを引き上げた。スボンを引き下ろされて、さらに顔を埋められるなんて、勿論初めてだ。

「何が『良い所』よ。祐巳ちゃん嫌がってたじゃない」

「『嫌よ嫌よも好きのうち』って言うじゃない！」

そんな事ないよ、由乃さん。

手刀を当てられた祥子さまはまだ気絶している。起きるとまた脱がされそうなので、そのままにしておこうと思つ。祥子さまとはお喋りをしながら飲みたかつたのに……

暫くすると、令さまとの喧嘩に嫌気が差したのか、日本酒の瓶を持って由乃さんがやって来た。

「もつ令ちゃんなんて知らない。祐巳さん飲も。私が日本酒の美味しさを教えてあげるわ。ほら、志摩子さんも」

そして、令さまを置いて二年生三人で飲んでいると、次第に祐巳達は意識を失つた。

祐巳に何が起こったか

1

世界が真つ赤だ。その真つ赤な理由がまぶたを閉じているからだと気づき、目を開けようとす。その隙間から白い光の刃が刺さってくる。駄目だ。とても目を開けられない。それに頭が割れるように痛い。

「皆さん朝になりましたよ」

志摩子さんの声がある。志摩子さんが窓のカーテンを開けて廻っている。カーテンが開き、光が差し込んだ所に寝ていた人が呻きをあげる。

細目から見える志摩子さんが窓をバツクに立っている姿は、まるで天使のようだ。

「皆さん起きましよう」

そう言つて、志摩子さんはお玉で鍋を叩く。二日酔いの頭にその音が直接響く。前言撤回。志摩子さんは悪魔だ。

「志摩子さん止めて！」

「じゃあ、起きましよう」

起きなければこの音は止まない。仕方なく、皆むくむくと起きる。志摩子さんつて、一番飲んでたと思っただけで、どうして平然としていられるんだろう？

乃梨子ちゃんと令さまはあまりダメージなさそうだ。場数を踏んでいる為に、飲む量を押さえていたのだろう。由乃さんも場数は踏んでいるはずだが、彼女にセーブが出来る筈がない。祥子さまは、鍋の音にもめげず、まだ寝ている。流石だ。志摩子さんも流石に諦めたようで、鍋を叩くのを止めた。

祐巳は起き出すとトイレに向かう。昨日水分を多く取ったためか、膀胱がいつぱいだ。一応お嬢様と言つても、トイレには行く。あ、本当のお嬢様なら二日酔いにはならないかも知れない。

用を足して、ほっと一息。パンツを上げると、何か違和感がある。よく見ると、パンツを後ろ前に穿いている。どうして？ 昨日パンツを脱いだ記憶も、当然後ろ前に穿いた記憶なんて無い。思い出そうとしても、頭が痛くて思い出せない。

「祐巳さん、まだあ？ 早くしてよ」

「あ、ごめん」

由乃さんが催促する。祐巳はパンツを穿き直して、外に

出る。

「ねえ、私パンツを後ろ前に穿いてただけと知らない？昨日何かした？」

「知らないわよ、そんなの。それに昨日の事全然思い出せないし」

由乃さんは飲み過ぎて記憶がないようだ。祐巳も少し曖昧だけど。それに、仮に記憶があつたとしても、他人ひとの目の前で堂々とパンツを脱いだり穿いたりしないので、知っている筈がない。

「あ、志摩子さん」

「何？」

「私、パン……」

そうだ。志摩子さんは記憶がありそうだとは言え、パンツの事まで知っている筈がないのは、由乃さんと一緒の筈だ。

「どうしたの？何か訊きたい事でもあるの？」

「ううん。何でもない」

「そうね、知らない方が良い事もあるし……」

そう言つて、志摩子さんは目を逸らした。何!? 何か知ってるの？

「何？何か知ってるの？私昨日何かした？」

「したと言つよりは……」

「されたの？」

「あ、朝食の準備が出来てるわよ。皆で食べましょう」

(はぐらかされた!?)

気になる。気になるけど、志摩子さんは教えてくれそうにない。他の人は記憶を無くしてそうだし。

「一体何が……」

こうして、誰もが楽しい思い出を作り、何か大切なものと記憶を失った、山百合会の夏合宿は幕を閉じた。当初の目的だった筈の学園祭の打合せがされなかったのは言うまでもない。

あとがき

お酒は二十歳になってから。酒は飲んでも呑まれるな。
飲酒運転など^{もつ}以ての外^{ほか}です。

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne
です。

山百合会へべれけ本です。一度山百合会の面々が酔った姿を見てみたかったので書いてみました。酔うと本性が出ると言いますが、普段と大して変わらない人もいるようです。酔った時の症状ですが、様子さまはデレ、令さまはメソな感じがします。志摩子さんが酔う所も見てみたいですが、志摩子さんの場合、鉄の肝臓が相応しいです。

今回の話は、元々は「魔法少女りりかるユーミ」の冒頭に書き、ユーミは夢オチにする筈でした。でも夢オチは好きでないのと、本編だけで分量がオーバーしたので、酔っぱらう話は削除してました。でも、やっぱり酔う所は見てみたいなど、その部分復活させました。

「ごめんなさい。他にネタが無かったのが真相です(汗) ちよつと」マリみて」でネタが浮かばなくなってきたので と言うか日常の話って考え辛いですね 暫く「マリみて」本とイベントへのサークル参加は休むつもりです。エロネタなら浮かぶかも知れないけど(爆) と言うか、今は「なのは」への情熱の方が上回ってるので、そちらに集中しようかなと。

そして、この本の執筆中に、コミックマーケット準備会代表を長らく務められた米沢嘉博^{よしひろ}氏が亡くなられました。日本の、いえ、世界の同人誌文化がここまで発展したのは、ひとえに彼の功績が大きいと思います。きつと今はイワイエモン氏と一緒に、大好きな同人誌を読んでいることでしょう。感謝を込めて送り出したいと思います。今までどうもありがとうございました。

’06年10月6日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『魔法少女リリカルなのはA's』『かしまし』の同人誌を発表する。

真夏の失敗

PARALLEL ACT SERIES

2006年 10月8日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>

E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

